

## 松嶋 義雄

赤道に近い椰子の木が茂る南の島「小スンダ列島」で猛暑の中を、完全軍装（背囊を負った時、両肩がしびれる程の重さ）を身につけて、険しい山道や草原の細道を、毎日の行程約四十きの徒歩行軍が続いていた。

夕日が西に沈むころ「クタクタ」に疲れて、その日の目的地に到着した。早速露営や食事の準備をする。

何時まで続くか我々にはわからない、最終の目的地は「ピルマ」らしい。最初はトラックに乗って移動していたが、敵の空襲を受け、地上掃射でトラックは全部焼けて使用出来なくなり、止むなく徒歩行軍になった。

我が部隊は「チモール島」の警備をしていたが、「ピルマ」戦線の部隊を救援するための移動作戦らしい。クーバン港から輸送船に乗る予定であったが、我々が乗る前の部隊が乗船して出発した。船は「バリ島」近くの海上で敵機の攻撃を受けて撃沈され、生き残ったのは三名であったと聞いた。その船は我が部隊が乗る予定であったが、乗っていたら私の運命も変っていたかも知わ

らない。

車も焼かれ船も沈んだので、仕方なく小スンダ列島の島々を歩いて、島から次の島へ移るには、夜間「大発船」で渡る。その「大発船」も、時々敵の攻撃を受けて撃沈される状態であった。

やっと夕食も終り休憩したところ、「全員銃を持って集合」の命令がでた。何事が起きたのかと思いながら集合した。中隊長の様子がおかしいと直感した。

中隊長が「気を付け、東方に向かって最敬礼、これから伝達することについて心を取り乱さないように」と言つて、「戦争は終わった、これからの部隊の行動については、上からの命令に従って行動する。各兵が持っている銃に刻まれている菊の御紋章を消すこと」と言われた瞬間全員シーンとして目に無念の涙をうかべ、齒をくいしばった。

「俺等はまだ戦争に負けていない、南方軍は最後の一兵になるまで戦う」と、大声でどなる者もいた。とにかく銃に刻まれている菊の御紋章をみんな無言でごしごしと消しながら、無念の涙が止まらなかった。

明日からの苦しい行軍がなくなり、重い荷物をおろさ

れた気持ちである。これから先我々の運命はどうなるのか、勿論内地（日本）へ無事帰る等とは考えられない状況であった。

後になって我々が終戦を聞いたのは、八月十五日「天皇陛下」が国民に敗戦のラジオ放送をされてから、十日後のことであつた。

我々は終戦を知らずに十日間位、毎日炎暑とたたかいながら必死の行軍を続けていたのであつた。



## 『表紙解説』

### 虫供養地蔵

佐伯市堅田の西城地区、山王公園内に祀られていた地蔵堂が雨漏りがひどくなり、地区のお年寄りが話し合つて新しく建て替へることにになり、壊してみると地蔵塔の光背の裏面に金石文が彫られていた。それには

「堅田村中<sup>ちゅう</sup>蛭蝗<sup>むしこう</sup>供養佛施主□人 荻苳清兵衛」

元禄八己亥年（一六九五）三月吉日

とあり、他に堅田村十一カ村名と各庄屋の名前、その下に百姓中と彫つてある。

この塔は毎年各地で行われていた虫送りや、捕殺などで犠牲になった虫類を堅田村中で供養するために建てたもので、昔は中山峠に造立していたものを、道路拡張の邪魔になるので現在の場所に移動したという。毎年、春には近くの信者が供物を供え、地蔵尊の前で供養祭りが行われている。

解説 五十川千代見

佐伯地方の虫供養については稿を改めて発表したいと考え、目下鋭意調査中です。